
消しゴム戦士の冒険

MABOROZUKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消しゴム戦士の冒険

【Nコード】

N5669Q

【作者名】

MABOROSUKI

【あらすじ】

ある日ごみ置き場で目を覚ました消しゴム戦士のポツクル。いつも一緒だったケンちゃんに会うために妖精のマリーと一緒に旅に出るのだった。はたしてポツクルはケンちゃんに会うことが出来るのだろうか？

旅立ち

・・・お、 おき おきて・・・

遠くから声がする。

・・・ねえ、起きてよ、おきてつてばあ・・・

だんだんはつきりする声に、ぼんやりと目を開ける。

「ねえ、聞こえてるんでしょ？こうなったら一発たたくしかないかな？」

何だつて？一発たたくだつて、僕はそれはたまらないと、目をこすりながら起き上がる。

「よかった、なあんだ、ちゃんと聞こえてたんじゃない。」

目の前には僕の知らない知らない人女の子が立っていた。

「君は誰？」

「わたし？私は妖精よ！」

そういつて女の子は僕に背中中の羽をパタパタさせて見せてくる。

「妖精？」

「そ、あなたを迎えに来たの」

「迎えに？でも僕はどこにも行かないよ、僕にはケンちゃんがいるからね。」

僕とケンちゃんはいつも一緒だ。遊ぶときはもちろん、出かけるときも、食事の時も、寝るときもいつも一緒だ。

「ふう〜ん、あなたの持ち主はケンちゃんっていうのね？」

まるでバカにしたような言い草に僕はムツと来た。

「なんだ、悪いのかよ！けんちゃんを悪く言うやつは僕が許さないんだからな！」

僕は背中中の盾と剣を構えた。どっちもケンちゃんがつくつてもので僕の大事な宝物だ。

「なに？その手に持つてるのは、あははははよく見たら、びんのふたと、プラスチックの棒じゃないの。」

げらげらと笑い転げる妖精にさらに僕は

「いいか、聞いて驚くなよ、僕は誇り高き魔法の国の戦士、ポツクルだ！ケンちゃんとたくさん冒険をして、どんな困難も乗り越えてきたんだ、とってもつよいんだぞ！あんまり馬鹿にすると、痛い目にあうぞ！」

ぼくは、胸をはって言ってやった。

「あははははは。ごめん、ごめん、でも、そんなに強い戦士様は、か弱い女の子に手を上げるのかな？」

さんざん笑って涙目になって、まだこみ上げてくる笑いをこらえる妖精に、僕は

「もちろん手を上げたりなんかはしないさ、でもケンちゃんをばかにするやつはゆるさないんだからね！」

「わかったわよ、ところで、さっきからケンちゃん、ケンちゃんいつてるけど、そのケンちゃんはどこにいるの？」

「どこって、すぐそこにいるよ！」

僕はケンちゃんを探す。いつも一緒なんだ、絶対に近くにいるはずだ。でも、どこにもケンちゃんの姿は見えなかった。

「あれ？おかしいな、いつもは絶対にそばにいるのに・・・」

そしてぐるっと見渡して、僕はまったく見覚えのない景色に驚いた。「そつえば、ここどこなんだ？」

慌てふためく僕に向かって妖精がため息をつきながら、

「ここ？やつと気付いたのね、ここはごみ置き場よ。」

「ごみ置き場って、あのごみ置き場？」

「そ、ごみ置き場。用がなくなつたものが捨てられる場所よ。」

聞き返した僕に妖精はすまし顔で答えた。

「うそだ、何かの間違いだ。きつとそうだ。だってケンちゃんが僕を捨てるなんて事はないんだから」

僕はそういつてキツと妖精をにらみつけてやった。

「ちよつと、そんな顔しないでよ、怒るならあなたを捨てたケンちゃんに怒ってよね。」

と妖精は両手を挙げてお手上げのポーズを徒つて見せた。

「とにかく、僕はケンちゃんのところに戻るから。」

僕は手に持っていた剣と盾をしまうと、妖精に背を向けて歩き出した。

「ちょっとまってよ、まだ話は終わってないんだから！」

僕はそういう妖精を無視した。

すると、急に地面が揺れて傾いた。

「うわああああ」

僕は何がなんだか分からずに、転がり落ちていく。

ぐるぐる目の前の景色が円を書いて僕くの周りをまわった。

転がりに転がって、ようやく止まって僕は立ち上がろうとしが、でもふらふらですぐに尻餅をついてしまう。

「大丈夫？」

さっきの妖精がパタパタと羽をはためかせて僕のところに来てきた。

「一体何が起こったんだ？」

「あそこから転がりおちたのよ！」

妖精が指差す先には、山済みになった箱や缶がたくさんあった。

そしてそれが次から次へと運ばれていくところが見えた。

「ほら、ごみ置き場だったでしょ？丁度ゴミ回収の時間のようね。」

嘘はついてなかったでしょといわんばかりに胸を張る妖精が憎らしかった。

もう一緒にはいたくはないし、なによりも僕は早くケンちゃんに会いたくてしうがなかった。

「じゃあ、本当に僕は行くから、じゃあね妖精さん。」

再び歩き出す僕。

「だーから、まってっていつてるでしょうに！」

そういつて妖精は僕の前に回りこんできた。

「どいてよ、僕はケンちゃんのところへ行くんだから。」

僕は邪魔する妖精を手で脇に押しやってやった。

「ちょ、ちよつと、じゃあ聞くけど、あんたはそのケンちゃんはどこにいるかわかるの？」

その言葉に僕の足が止まる。それを見た妖精が、

「ほーら、わかんないんだ！それなのに一体どこへ向かうって言うの？」

「う、うるさいなあ、どこへ行こうが僕の勝手だろ？」

「あ、そう。でもあてずっぽうに探しても、この広い世界、人を探すのは大変よ？」

本当にいやな妖精だ。僕をからかって楽しんでいるに違いない。

「じゃあ、お前なら分かるって言うのかよ！」

乱暴に言い返す僕に

「もちろん、分かるわよ！」

そういと妖精は腰のポーチから一個、何か液の入ったビンを取り出した。

「ちよつとごめんね。」

そういつて近づいてきた妖精は僕の頭のとっぺんをつねった。

「いたいよ！何するんだよう」

「あ、ごめんごめん。でもこれが必要なのよ。」

そういつて手のひらには僕の頭からちぎりとった小さなちいさな塊があった。

「これをこの中にいれてつと」

そういいながらさつき取り出したビンのふたを開けてポチャンと手の中のそれを入れた。

そして僕の目の前でしゃしゃかと振り始める。

「さあ、色が変わってきたわ。」

ビンの中の透明だった液が黄色、赤色そしてピンク色になった。

そしてそれを満足そうに眺めると、

「じゃあさっきのプラスチックの棒、じゃなかった、剣を出して。」

僕は言われるがままに剣を妖精に手渡した。妖精はそれを手に持つと、

ビンのふたを開けて中のピンク色の液を剣に振り掛けた。

「あ、」

すると液はどんどん剣に染み込んでいってぼんやりと光を発した。

「はい、どうぞ。ちよつといろんな方向に向けてみて」

僕は手渡せた剣を軽く振ってみる。すると強く光ったり弱く光ったりするのが分かった。

「これって・・・」

「そう、これでケンちゃんのいる場所を探すのよ。ちなみに、ケンちゃんがいるほうに強く光るわよ。」

そう聞いて僕は強く光る方向を探した。するとある方向に強く光り反応した。

「どうやらそちにケンちゃんがいるようね。さ、行きましようか」
そういつて背中の中の羽をはためかせて僕の前に行く。

「どうしたの？ いかないの？」

歩こうとしない僕に振り返る

「あ、うん、いくよ」

そういつて歩き出した僕に妖精が

「そういえばまだ自己紹介してなかったよね？ わたしはマリー、よろしくね。」

そういつてマリーは僕にウインクをしたのだった

雨

「ふんふんふんふん」

前を飛んで行くマリーはどこか楽しそうに口笛を吹いている。

僕はそんなマリーの後姿を見ながらケンちゃんのことを考えていた。一体ケンちゃんは僕を置いてどこにいつてしまったんだろう。この前新しく始めた冒険だって

まだ終わっていないし。こんなことは今までなかったはずだ。いつも必ず最後まで冒険はやり遂げる。それが僕とケンちゃんの約束だった。

「どうしてケンちゃんは僕を捨てたのかな？僕が弱いから？それとも、ほかに強い戦士がみつかったから？」

知らないうちに僕は口にしちゃったようで、マリーが振り返って「さあね、でも一つだけ言えることは、あなたは、ケンちゃんにすごく大事にしてもらっていたということね。」

「そりゃあ、そうさ、だって僕とケンちゃんはずっと、ずっと一緒だった。それはこれからも変わらないよ。」

僕は一抹の不安を振り払うように言った。そう、きっとケンちゃんには僕のことを捨ててない。そう信じてるから。でも僕は一つどうしても気になることがあった。

「ねえ、マリー。どうして君は僕が大事にもらっていたって分かったの？僕と君は始めてあったばかりなのに。」

するとマリーは良くぞ聞いてくれましたとばかりに、僕のほうによってきた。

「そう、それをあなたに話したかったのよ。忘れるところだったわ。」

そういつてマリーが手をふると、次の瞬間、どこからともなく、一本の杖が出てきてマリーの手に収まった。この前ケンちゃんが教えてくれた『マジック』ってやつなのかもしれない。

「おっほん、わたしたち妖精は『想い』を集めているの。」
「想い？」

「そう、特にわたしが集めているのは、物に宿った『想い』で、いろんなものがあるわ。いいものもあれば、悪いものもあるの。」
「そういつてマリイは空に2つの白と黒のマルを杖で書いた。」

「ふむふむ。」

おとなしく話を聞く僕にマリイは続ける。

「でね、いい『想い』は幸せを呼んで、悪い『想い』は不幸を呼ぶの。わたしはその集めたい『想い』で悪い『想い』を消して、少しでもみんなが幸せになれるようにつてね。」

マリイは白いマルをぐるぐると円でなぞり、黒いマルにバツ印をつけた。

「でもそれと僕が何の関係があるのさ。」

「そうそう、ここからが肝心なの、良く聞いてね。」

マリイの真剣な顔を見て僕はごくりとつばを飲み込んだ。

「その『想い』の中には、たまに特別なものがあつて、特にものすごく大事にされた物なんかに宿ることが多い。で、捨てられてもう一度持ち主の所に帰ることが出来れば、その『想い』は生まれ変わることが出来るの。」

「生まれ変わる？何に？」

「何につて、わたしと同じ妖精によ。」

とマリイは胸を張つて言った。

「ふん」

僕が人事みたいに相槌を打つと

「なに人事みたいに思つてるのよ。その特別な『想い』があなただつて言つてるのよ！」

「へ？」

突然のことに間抜けな返事をしてしまった。

「へ？じゃないわよ。あなたはこれからもう一回ケンちゃんにあつて、妖精に生まれ変わるのよ！」

なんだって？僕が妖精に？冗談じゃない。もしも妖精に生まれ変わったら、ケンちゃんと遊べなくなってしまう。

「嫌だね。僕は妖精なんかにはならないよ。僕はそんな事のためにケンちゃんに会いに行くんじゃないんだ！また一緒に遊ぶために会いに行くんだから。」

そうマリーに言ってやった。

「まあ、いずれにせよ、それは着いてから決めてもいいことだし。でもこれだけは忘れないでね。あなたの『想い』は、まだいいものか悪いものは決まっていけないの。」

「何言ってるんだ、僕は正義の味方なんだぞ。悪なわけがない！」

「そういう意味じゃないんだけどね。ま、この旅の終わりにはどっちなのか多分わかるでしょう。もっともわたしが見つけた時点で、あなたはきつと、いい『想い』になるわ。」

僕はちよつと意地悪な質問をでマリーにぶつけてみた。

「それは分からないじゃないか、もし、僕が悪い『想い』になったらどうするのさ。」

するとマリーは悲しい顔をして

「そのときはあなたは悪魔になるわ。そしてみんなに不幸を撒き散らす存在になるの。もちろんケンちゃんにもね。」

ケンちゃんに不幸が降りかかる？それだけは嫌だ。僕は首をぶんぶん振った。

「ま、あたしが付いてるから大丈夫よ。」

そういつてマリーは僕の背中を元氣付けるようにポンポンとたたいてくれたのだった。

そんな話をしているうちに空から水が降ってきた。

「た、大変だ？空から水が降ってきた！」

前にケンちゃんと一緒におっきな湖で遊んでいたときも突然水がふってきたことがあったことを僕は思い出した。でもそのときよりもこの水はかなり冷たい。

「なんだ、知らないの？これはね、雨って言うのよ」

「雨？」

「ほら、これを使って。こうやって使うのよ。」

マリーは葉っぱを二枚ちぎるとその一つを僕に手渡すと、茎の部分を持って自分の頭の上に掲げてみせた。

僕もそれにまねてやってみると、水は葉っぱの上を通って脇に流れていった。

「これ、おもしろいね」

僕はポタツ、ポタツ、と葉っぱの上からする音の心地よさに心がおどる。

「ところであなた・・・」

そう言いかけたマリーに

「ねえ、僕にはポツクルって名前があるんだけど、ちゃんと名前で呼んでよ！」

「ああ、ごめんごめん。じゃあポツクル、雨も知らないところを見ると、ずっと家の中にいたの？」

「家の中？それってどこ？」

そう聞き返すとマリーは上を指差して

「ほら、あの中よ」

と、高くそびえる箱を差した。

「で、今は外にいるの。」

「中？外？」

よくわからないでいる僕に

「簡単言つと、あなたが今までケンちゃんと一緒にいたところが中で、ここが外。中よりも外はすごく広いの。いまいちぴんと来てないって顔ね。」

僕の顔を覗き込んでマリーはため息をついた。

「まあ、ポツクルは結構小さいし、仕方ないか。とにかく、外は中に比べて危険がいっぱいだから、注意してね。たとえば・・・」

小さいって言葉にムツとなったが、マリーはどうやら僕よりもたく

さんいろいろ知っているらしい。話を聞くためにも僕は言い返すのをやめた。

「カラスは特に注意ね！あいつらは悪魔のように黒くて乱暴者だから特に注意しないと。」

そのときだった。急に僕の足が地面から離れて仰向けになった。

「どうなってるんだ？」

周りを見ると僕は水の上に浮いていた。おまけに、水の流れに乗ってどんどん流されていく。

「マリー助けてくれ！」

僕の叫び声に気付いたマリーが流されていく僕を見て驚く。

「ポツクル！」

そういつて僕の手を掴んで引き上げようとするが水の流れもあってうまくいこうに行かない。

「やばい、このままだと排水溝に落ちちゃう！」

先のほうを見るとぐるぐると渦を巻く黒い穴が見えた。

「マリー頑張つて！」

僕も必死に水から出ようとすが、虚しく水をかいただけだった。

「きやああああ」

「うわああああ」

そして僕たちはそのまま渦に飲み込まれて深い深い穴に落ちていったのだった。

地の底

「う、ううう」

気がつくと僕は暗闇の中にいた。

「ここはどこだろう？」

そういえば僕は流されて穴に落ちたんだった。目がだんだん慣れてくるとぼんやりと周りの様子が

見えてきた。どうやらあたり一面高い壁になっているらしい。

「もうすこし明るくしないとよくみえないな。」何か光るものはないかと探したけれど、これといって役に立ちそうなものは無かった。

「そうだ！」

僕は背中の中の盾を持つと剣を引き抜いてみた。思った通り、剣はぼんやりと光を放ち辺りを照らした。

壁を照らしてみると表面はヌラヌラと光って気味が悪い。

「こっち側はどうなっているんだろう。」

ひんやりと冷たい地面を照らしながら歩くと急に地面が無くなってしまった。恐る恐る覗き込むとその下は水がすごい勢いで流れている。

「この剣がなかったら、僕は今頃あの中に落ちてかもしれないな。」

僕は思わずぶるぶると身震いをした。

「これもマリーのおかげだな。そう言えばマリーはどこにいったんだろう。」

最後まで僕を助けようとして結局一緒に落ちたはずだ。

「マリー、どこにいるの？」

僕は大声でマリーの名前を読んてみた。

「まさか僕を置いてきぼりにしてどつかにいつちゃったのかな。」

そういつてちよっぴり僕はさみしくなった。

「きやあああ」

するとそう遠くない所から悲鳴が聞こえた。

「マリー!？」

僕は悲鳴のしたほうへ急いだ。

「やめて、こっちにこないでよう」

角に追いやられたマリーに大きなネズミが迫っていた。

「こいつ、マリーから離れる。」

僕は剣を振りかざしてネズミとマリーの間に割り込んだ。

「チ、チュウ」

突然現れた僕にネズミは驚いているようだった。

「えい！」

僕はネズミの鼻先を剣で思いっきりつついてやった。

「チュツ!？チュウ！」

するとネズミは鳴き声を上げて逃げて行ってしまった。

「マリー大丈夫かい？ネズミはもうどこかに行ったよ。」

僕は隅っこで丸くなったマリーに話しかけた。

マリーは僕の顔を見ると

「恐かったよう。」

といって泣きながら僕に抱きついてきた。

「マ、マリー？」

僕は生まれてこのかた、女の子に抱きつかれた事なんかなんてない。初めてのことに思わずドキドキしてしまう。マリーノサラサラと流れる金色の髪が僕の頬をなでて少しむずかゆい。

しばらくして落ち着いたマリーは

「ポツクル、助けてくれてありがとう。わたしネズミが苦手なのよ。」

と顔を赤くしながら僕に言った。

「そうなんだ。まあ苦手なものは誰だって一つや二つはあるもんだよ。」

「ありがとう。ポツクルは優しいのね。」

元氣なく笑うマリーに僕はマリーを安心させようとして

「それにまた来たら、僕が追っ払ってあげるから、安心しなよ！」

そういつて剣を高く掲げてみせた。

「頼りにしてるわ。」

僕は剣をそのままにして盾を背負うと、はぐれないようにマリーの手をにぎって歩き出した。

「ねえ、マリーここって何処なのかな？」

「ここは下水道ね。」

「下水道？」

「そうよ。そして地面の中にあるの。」

「地面の中って、じゃあ、もう上にはでられないの？」

絶望が僕を包む。だってこれじゃあケンちゃんにあいにいくことなんかないじゃないか。

「大丈夫よ。このままその下水の流れに沿っていけばいつかは出られるわ。」

マリーの言葉に希望の光が僕の心にとる。

「でも、いつ出られるか分からないでしょ？」

「まあね。でもきつとすぐよ！」

それからしばらく僕とマリーは無言で歩いた。どこまで行っても見えるのは高い壁と下水の音だけ。

僕は少しでも気を紛らそうとしてマリーに話しかけた。

「ねえ、そういえマリーは妖精になる前ってなんだったの？」

急に声をかけられて驚いたのか、つないだマリーの手がびくつとなつた。

「ああ、わたし？わたしはお人形よ。でもどうして？」

「だって、マリーもこうやって持ち主に会いにいったのかなって思ってた。」

「うーん、わたしの場合はボツクルの何倍も大きかったから、こんな風に歩いては無理だったわ。」

「どうして？」

「だって、お人形が歩いてるのをみたら、みんな驚くでしょう？」

「そうかなあ？」

僕は首をかしげた。

「そういうもののなの」

「でも、それじゃあ持ち主の下にいけないじゃないか、どうやっていったのさ？」

「運かな。」

「運？」

「わたしは自分で移動できない代わりに色々な人の手をわたって行ったわ。その間にいろいろな国を回って、いろんなものを見て・・・」

「

「ふう〜ん。で、どれくらいかったの？」

「さあ？どれくらいかったのはわからないわ。きつと何十年だったのかもしれないわ。」

「そんなに長い時間・・・忘れられちゃうんじゃないのかな？」

「そうね。でも、わたしがあの人にとどり着いたとき、もうその長い旅でぼろぼろだったのに『ずっと会いたかったわ。』って、わたしのことを抱きしめてくれたわ。」

マリーは目をじっと閉じてそのときのことを思い出しているようだった。

「そっか、僕もどれだけかかるかわからないけど、ケンちゃんに会えたとき、『会いたかった』って言うてもらえるかな？」

「もちろんよ！だから一緒に頑張ってケンちゃんのところに行きましょー！」

「うん。ありがとう、マリー。」

僕は絶対に何があってもケンちゃんのもとにとどり着いてみせるところに誓ったのだった。

「こっちなのかな？」

僕達はなんとか下水道から出ようと、出口をさがしてかなりの時間歩き続けていた。

しかし、いくら歩いても一向に出口は見えてこなかった。

「ねえ、ちよつと休憩しようか。」

脇に転がっていた空き缶にマリーはちょこんと座る。

「そうだね、さすがに少し疲れちゃったよ。」

僕もマリーの横に座った。

マリーは腰のポーチから赤いものを2つ取り出すと、

「食べる？美味しいわよ。」

といって僕にその片方を手渡す。マリーは残ったほうをかじるともぐもぐと口を動かした。

「食べるって行っても・・・どうやって？」

僕もマリーのように口に持っていくが、かじるどころか、つるつると滑ってしまう。

「あ、そうか、食べれないんだった。ごめんね。」

「そうなの？」

「うん。その体では無理ね。でも、妖精になれば食べれるようになるわ。ポックルが妖精になるときまでとっておいて上げる。」

そういつてマリーは僕から赤いものを受け取るとまたポーチにしまった。

「いらないよ。だって僕は妖精にならないから。」

「そう？妖精になったら他にもたくさん楽しいことが待ってるのに。」

「
そういいながらマリーは最後のかけらを口にぽんと入れて、指に残ったのを舐めた。」

確かに食べるということに興味はわいたけど、でも僕はそれよりもケンちゃんと一緒にいるほうがいい。

そんなことを考えていると、暗闇の向こうからカサコソと音が聞こえてきた。

「うん？なんだろ、この音は・・・」

僕は音のするほうを剣で照らしてみた。するとその中から茶色のへらべつたいものが浮かび上がった。

表面は光にたらされ、そこからピンと突き出た糸の様に細いものが

ゆらゆらと動いている。

「マリー、これなんだろう?」

僕の声に振り返ったマリーがそれを見てさっと顔を青くした。

「ご、ご、ゴキブリよ!」

「ゴキブリ?なにそれ?危険なの?」

ただならないマリーの様子に僕も背中盾を構える。

「危ないってもんじゃないわ。こいつは何でも食べるの。ポロツクあなたも例外ではないわ。」

「なんだって!」

驚く僕の光の向こうの闇の中に、どんどんカサコソという音が増えていく。

「一匹見たら百匹はいると思え・・・やばいわ、逃げないと!」

マリーと僕は走ってその場を逃げ出した。

カサコソカサコソカサコソ後ろから僕達を追ってくる足音が聞こえる。

「いつまでついてくるんだ?!」

と、急に目の前の地面がなくなってしまった。

「しまった!」

振り返ると壁、天井、床一面に何十という茶色の塊が剣の光にぼつと浮かび上がった。

「追い込まれちゃったわ。どうしよう。」

じりじりとゴキブリがこつちによってくる。

もう僕達には後がなかった。

「マリー飛んで逃げるんだ!こいつらは僕がひきつけておくから!」
そういつて僕は剣と盾を構えて一歩前に踏み出す。

そんな僕にマリーは

「そんなの駄目にきまつてるでしょ!ポツクルこそ逃げて!」

「いやだ、僕は女の子を置いて逃げるなんて出来ない。だって僕は戦士なんだから!」

意気込んでみたものの、でもどうしたらいい・・・この数はさすがにやばい。いざとなったらこの中に飛び込むしかないか・・・僕はそう思ってた下水のほうを見ると白い板のようなものがぶかぶか浮いて流れてきた。

「これだ！マリー、あの白いのに乗ろう！」

僕はタイミングを見計らってポーンと飛び移る。

「ポツクル待つて！」

マリーも白い板に飛び乗ってきた。

水の勢いが早いせいか、どんどんさつきいたところから離れていく。

「間一髪だったわね。」

マリーはホッとため息をついた。そして僕に向き直ると

「ポツクル、もうあんな無茶なことは言わないでね。」

「どうしてさ、」

「だってこの旅はあなたがいてこそなのよ。それにいざとなったらわたしは飛べるし、なんとかできるから。」

「わかったよ、・・・。」

きつとそれは本当のことなんだろう。僕はうなだれる。

「分かってくれたのならいいわ。でもさつきはありがとうね。ちよっぴりかつこよかったわよ。」

そんな僕を慰めるかのようにマリーは言った。

僕はそんなマリーの顔を見ることが出来ず、前を眺めた。すると奥のほうに白い点を見つけた。

「あれ、あんだらう？」

白い点はどんどん大きくなってくる。

「きつと、出口だわ！」

そして白い点は次第に光となり、そして僕達はその光の中へ入っていったのだった。

世界

光に包まれて目の前が真っ白になった。

「ま、まぶしい」

僕は目をしばたいてゆっくりと目を開けた

「わぁ」

僕は目の前に広がる光景に思わず声を漏らした。

上には赤い空が広がっていて、下の水にはそれが反射してキラキラと光っている。

「川に出たのね。」

マリーが後ろで額に手をかざしながら言った。この水がたくさん流れているところは川というらしい。

僕は乗ってきた白い板の縁から手を伸ばして川の水をすくった。ひんやりとしていて気持ちがいい。

ごろんと横になるとじっと空を見上げた。ふわっと風が吹いてきてさっきまであの下水道の中にいたのが遠い昔のように思えた。

「ポツクル、岸に着いたわ。降りましょ。」

気がつくと板は川から出っ張った石に引っかかり止っていた。

「ま、まってよ。」

マリーのあとを追って僕も板から降りた。

「そろそろ日が暮れるわ。今日はここまでね。」

そういつてどんどん暗くなっていく周りを見渡すマリーに

「どうして？ せっかく下水道から出られたんだし、もっと行こうよ。」

そついう僕にマリーが腰に手を当てて

「夜はね、昼間と違って危険なのよ。それにわたしはもう疲れてくたくたよ。」

「丁度いいわ、あそこで夜を明かしましょ。上に橋もあるし。」

マリーは大きな影のなかにあった筒のようなものを指していった。

近くまで行くとそれはトンネルみたいになっていて、向こう側も開いていた。

「これって・・・」

「ああ、何かの配管用のパイプね」

そうついいながら辺りに落ちていた落ち葉を拾ってきて中に敷いていく。

「なにしてるの？」

「こうするとね、わりと暖かいのよ。ほらポツクルも手伝って！」

僕もマリーに言われるまま手渡された落ち葉を敷いていく。そして最後に内側からふたをするように落ち葉を入り口に立てかけた。

「ちよつと薄暗いわね。ポツクル、剣を貸して。」

剣を受け取ったマリーは剣の方向を色々変えながら、光の強さを調節した。

「これでよし！」

マリーは敷き詰めた落ち葉の上に寝転んだ。

「ほら、何ボーっと立ってるのよ。ポツクルも横になりなさいよ。」

「う、うん」

横になると、落ち葉が僕の体を支えてくれた。

「明日はどうするの？」

僕は横に寝転んだマリーに話しかけた。

「そうね、また剣で方向を確かめながら歩いていくしかないわね。」

ふああと大きなあくびをしながらマリーは言った。

「そっか」

「じゃあわたしはもう寝るわ。お休み・・・。」

マリーは自分の上に落ち葉をかぶせると、よっぽど疲れていたんだろう、あつという間に寝息を立てて寝てしまった。僕は剣を盾の下にしまって暗くする。ケンちゃんも寝るときはいつも暗くしてたのを思いだしたからだ。

「ケンちゃんは今頃何をしてるんだろう・・・僕がいなくて寂しがつてないかな。」

ふと横を見ると、入り口に立てかけた落ち葉の切れ目から夜空が見えた。キラキラと星がまたたいている。

「そういえば、ケンちゃんによく夜空の星を眺めたっけ。」

僕はケンちゃんとまた一緒に星空を眺めることが出来るんだろうか・
・だんだんボーっとしてきたのを感じて、そしていつの間にか僕も深い眠りに落ちていったのだった。

「う、まぶしい」

僕は突然の光に目を覚ました。

「ポツクル、起きて、朝だよ！」

目を開けるとマリーが外でうーんと背伸びをしている。

「今日もいい天気だよ」

外に出ると真つ青な空が広がって、すがすがしい風が吹いていた。

僕たちは身支度を終えた後、剣をかざして行く方向を確かめた。

「こっちな」

そういつて歩き出すマリーに僕は聞いた。

「ねえ、マリー。方向はわかるのはいんだけど、後どれくらいか
つてのはわからないの？」

「もちろん、分かるわよ。」

マリーはあっさりと答える。

「どうやって分かるの？」

「今剣は光ってるでしょ？」

「うん。」

「それがね、近くなるにつれて点滅するようになるの。で、本当に
あと少しってなると、青色に光り輝くわ。」

「そうなんだ！」

そういつて僕は剣を確かめた。でも相変わらずぼんやりと光ったま
まで点滅すらはしそうにはなかった。

「ま、昨日の今日じゃ、まだまだだよ、気長にやりましょ。」

しょんぼりした僕の肩をぽんぽんとたたく。

早く光って欲しいな、そのためにはもっと早く歩かないとな。そう思いながら、僕は草を掻き分けながら歩いていく。今までの道に比べて

「はあ、僕も飛べたらもっと早く移動できるのに・・・」

前を飛んで行くマリーを見ながら思わず僕の口からそんな言葉が出てしまう。

「妖精になれば、あなただってわたしのようになれるわ。」

そういつてマリーはニンマリしながら羽を羽ばたかす。

「どうして、マリーはそんなに僕に妖精になることを進めるのさ」

「もちろん、ひとつはあなたが妖精になれる『想い』だからよ。あとは、そう、わたしはボーイフレンドが欲しいの。」

「ボーイフレンド？」

聞き覚えのない言葉に僕は首をかしげる。

「パートナーのことよ。そしてわたしと彼は二人で世界中を旅するの！いろんなところに行っているんなものを見たり、食べたり、聞いたりして、ずっと一緒なの。もちろん、『想い』を集めてみんなを幸せにしながらね！」

「へ、へえ。」

うつとした目をしたマリーの言っていることの半分は分からないけれどなんだか楽しそうだった。

「まあ、あなたがわたしのボーイフレンドになるかは分からないけど、あなたは勇気もあるし、やさしいきつと素敵な妖精になるわ。ま、候補として考えといてあげるわ。」

「そ、そう。ありがとう。でも、僕は妖精にはならないから。」

釘を刺しつつ、僕は一応お礼だけは言っておいた。

「それはそれでいいわ。それにね、またケンちゃんに会えたとして、いつかは必ず別れの時がくるの。だからそのときまで待つてあげてもいいわ。」

「なんだって、そんなことあるわけがないじゃないか。次にケンち

やんに会ったら、もう僕は絶対にケンちゃんから離れないんだから！」

今でさえ、こんなにケンちゃんに会いたいの、こんな思いをしてもう一度会えたとしても、その先に別れがあるなんて、僕は考えたこともなかった。

「まあ、それもこれも、まずはケンちゃんのところに行かないとね！ほら、先を急ぎましょ」

と、急に僕達の横を大きな丸いものが通り過ぎていった。

「な、なんだ？」

見送るとそれには見覚えがあった。確かあればケンちゃんに乘せてもらった車だ！

「おおきな車だなあ」

僕は感心したように言つと

「ポツクル、車知ってるんだ。」

「うん。ケンちゃんが持つてたんだ。もつと小さいけどね。」

「そつか、でもあの大きさが本物よ。あのタイヤに踏まれたらぺしやんこになるから気をつけてね。」

それから僕はタイヤに踏まれないように道の端を歩いた。よく辺りを見渡すと、すべてが自分の何倍も大きくて驚いた。大きな柱のそばを歩いてるときによつてきた犬には本当にびっくりした。

もじやもじやのあのデカイからだは今まで戦ったどんな敵よりも大きくて、口から覗いた牙は鋭かった。

クンクンと鼻を鳴らして近くによつてきた時はもう本当に駄目かと思つたけれど、ひとしきりにおいをかいだら柱におしっこをかけてどっかに行つてくれたから、ホツとした。マリーが言うにはこちらから何もしなければおとなしいらしい。間違つても僕はあんな大きな化け物に何かしようなんてさらさらおもわないけれどもね。とにかく、僕は自分がどれだけ小さくて、そして世界には僕なんかよりももっともつとでかいものであふれているということを僕は知つた。そんなこんなで歩いていると、急に僕達の上を巨大な影が通り過ぎ

た。

「また犬かな？」

そういった僕にマリーが焦って言った。

「カラスよ、伏せて！」

「え、カラスって前に言っていた？」

そしてもう一度影が横切った時だった。気がつくとい僕は何か挟まれていた。周りを見ると、どんどん周りが小さくなっていく。

「これは、僕はどうしたんだ！」

「そのカラスまでえっポツクルをはなせえ！」

後ろのほうからマリーの声が聞こえる。どうやら僕はカラスにさらわれて空を飛んでいるらしい。

「ええい、こうなったら！」

マリーはいつの間にか杖を持っていて、僕のほうに向けて

「えい！」

と振った。すると杖の先から光がでて飛んできた。

「カ、カア」

カラスがそれに驚いて鳴いた。そして、それと同時に僕の体が自由になる。そしてそのまま真っ逆さまに落ちはじめた

「わあああああ」

「ポツクル」

マリーは必死に僕を追いかけたが、だんだんマリーの姿が小さくなっていった。

そして僕は空を落ちながら気を失ってしまった。

現実

「おい、お前大丈夫か？」

「つんつんとつかれて僕は目を覚ました。」

「ったくよお、いきなり空から落ちてきたからビックリしたぜ。」

「そういいながら、背中の黒い翼をパタパタさせている。どことなくマリーに似ているが、顔以外が黒いのと尻尾があるのは違った。」

「空から？ああ、そうだった。」

「僕はカラスにさらわれて、マリーが助けてくれたけどそのままっ逆さまに落ちたことを思い出した。」

「どうやら、お前も持ち主に会いに旅してるってところか、」

「そういつて僕をしげしげと見ながら、回りをぐるぐるまわる。」

「えつとお、君も妖精なの？」

「僕の質問に一瞬目を見開いたが」

「まあ、そんなもんだ。」

「ガサガサと後ろから草を掻き分けて一つの影が出てきた。」

「ザッシュ、ここにいたのか。」

「出てきたのは僕より一回り大きく、鎧兜をまとっていた。」

「おう、アルトか、丁度いい所に戻ってきたぜ、お前の仲間だよ。」

「僕はとりあえず二人に自己紹介をすることにした。」

「僕はポツクル。カラスにさらわれてそれで、マリーに助けってもらったんだけど、そのまま落ちちゃって、」

「カラスか、あいつらは本当に手癖が悪いからなあ」

「ザッシュが腕組をしながらうんうんとうなずく。」

「ポツクル殿。それは災難だったな。私アルト、君と同じように私もご主人様を探して旅してをしている。そして、この後ろのお方が私を目覚めさせてくれたザッシュ殿だ。」

「そういつて僕に手を出して握手を求めてきた。」

「アルト、その背中の中……」

僕は握手をしながらアルトの背中の中が青く光っている事に僕は気がついた。

「これって、もしかして・・・」

「なんだ、知ってるのか、なら話は早いな。そうさ、アルトのご主人様とやらが近くにいてるってことさ。」

ザッシュの言葉にアルトはぐつとコブシを握り締めながら

「ご主人様を捜し求めて早3ヶ月。やっと、やっとご主人様に会うことが出来る。また遊んでもらえの科と思うと、待ち遠しい。」

「そっか、よかったね、アルト」

アルトのその姿を見て僕の頭にケンちゃんのことをよぎる。僕も早くケンちゃんに会いたい。

その前に、マリーと合流しないと。

「アルト、ザッシュ、僕はまだまだ旅の途中だし、マリーも探さないといけないから、行くね。」

そういつて2人に別れを告げたときだった。

「あ、アルトがこんなところに、なくしたとおもったのにな・・・それとなんだろう？この消しゴム見たいのは・・・まあいつか。」

突然僕達の上にぬつと大きな手が出てきて僕とアルトを掴み上げた。そのまま僕たちはその手に運ばれていった。

コトン、そして僕とアルトは急にその手から下ろされた。

「ま、まこと殿、やっと会えた・・・。」

アルトが感極まった声を出して震えている。

「良かったな、アルト！」

後から追ってきたザッシュがそんなアルトの肩をぽんぽんとたたいた。

僕は巻き込まれてここまで来ちゃったけれど、まさか再会する場面に出会えるなんておもっても見なかった。

しばらくすると足音がしてアルトや僕なんかよりも大きなロボットの巨人が現れた。

「現れたな、亡霊騎士アルト、わたしが成敗してくれる！」

そういつてアルトに大きな剣で切りかかる。

アルトは槍を構えてその剣を受け止めるが、

「喰らえ、必殺！」

次の瞬間、アルトはポーンと投げられて、壁に激突する。そしてその衝撃でヤリが折れ、足が取れた。

「しぶといやつめ、これでどうだ！」

すると、黒い筒のようなものが出てきてアルトに狙いを定める。

パシュ、パシュ、パシュと、音がするたびに、アルトの鎧は欠け、

手足がちぎれとび、そして兜に穴が開いた。

「ふ、ふ、ふ、これで最後だあ！」

そして、アルトの上に大きな分厚い本が落ちてきて・・・ぐしゃつと音がした。更にその上から足でどんと踏みつけたのだった。

僕は目の前の光景にただ、震えることしか出来なかった。

すると今度は、

「その小汚い兵士め、今度はこの剣で切り刻んでやる。」

そういつて手からカチカチと光るものが出てきた。

「くらえ！」

そういつて僕を押さえつけてきりつけようとしたときだった。

「まこと、おやつよ！」

遠くから声がした。

「はい。いまいく。」

そういつて僕を放り投げ、足音が去っていった。

「おいおい、こいつはひでえな」

ザッシュがあるとの上の本をどかさうとしていた。

僕もザッシュを手伝って何とか本をどかすことが出来た。

下から現れたのは粉々に砕け散ったアルトとだった。

「ア、アルト・・・」

言葉失う僕を尻目にザッシュがそのアルトの残骸を掻き分けて、

「あ、あつたぜ、」

と何か取り出した。

ザッシュの手の中には黒い光の球があつておもむろにザッシュがそれをかじる。

「うひゃー、またこいつはすごいしい味になったな」

「そ、それってまさか、アルトの・・・」

「うん？そうだぜ、これがアルトの『想い』さ」

「お、想いつて、食べちゃったらアルトが妖精になれないじゃないか！」

そんな僕の言葉もお構いなしにザッシュは最後の一口をむしゃむしやと食べて飲み込んだ。

「こいつは、特別な『想い』を宿しなかったからな。ちょいと力を貸してやったんだよ。」

「でも、ならどうして」

「ま、こいつが捨てられていたところに一緒に碎けたこいつの仲間がいてな、もしやと思つてここまで旅をしてきたけどよ、まさかこんな結末になるとはな」

そういつてザッシュはぱちんと指を鳴らした。すると

「ママー痛いよう。」

「まあ、まこと！手をどうかしたの？まあ大変。」

と向こうから子供の泣き声が聞こえてきた。

「何したの？」

「お仕置きだよ、なあにちよつと手を切っただけさ」

黒い『想い』、そして突然の不幸に似た出来事・・・そして僕はあの確信にいたった。

「ま、まさか、ザッシュは悪魔？」

「ああ、そうさ、悪魔だよ。」

そついつて背中のとんがった翼をパタパタさせて、そして尻尾をくねらせた。

「お前は、食べるためにアルトを利用したのか？！おまけにその持ち主に怪我までさせて・・・」

僕は盾を構え剣をザッシュに向ける。

「おいおい、何か勘違いしてないか？俺はよ、アルトの仇をとつてやっただぜ、」

「で、でも、そうかもしれないけど、もしもザツシュと、悪魔と一緒にじゃなかったら、アルトはこんな目にあわなかったかもしれないじゃないか！」

そう言った僕にザツシュはギッと睨みつけた。

「いいか、その耳を開いて良く聞けよ。お前はどうかそのマリーとかいう妖精に言われたか分からないが、みんながみんな持ち主に再会できるとは限らないんだ。もちろん俺達、妖精や悪魔が一緒に旅をするからそうならないように努力はするさ。そして、再会出来たとして、それがすべてハッピーエンドで終わるものだとは限らないんだよ。このアルトがいい例だ。」

そういつてザツシュはアルトの破片の一つを拾って握りしめた。

「こいつだつてよ、何日も何日もご主人様、ご主人様に会ったつて言つて、いろんな危険な目に会いながらやつとここまでたどり着いて、こんな結末になるなんて、これが俺のせいだつて言うのか？違うだろ？お前も見ていた通り、アルトのご主人様がやったことなんだよ。」

僕は剣と盾をいつの間にかおろしてうなだれていた。

「お前も、お前の持ち主に再会したときにどうなるか、分からないぜ。」

そういつてザツシュに肩をポンと叩いて

「ほら、今度はお前が切り刻まれないうちにいくぞ」

僕は促されて歩き出した。そして一度だけアルトを振り返つてつぶやいた。

「さよなら、アルト」

外に出ると強い風が吹いていた。

前に行くザツシュが振り向いて僕に話しかけた。

「ここまでくれば大丈夫だろう。お前はこれからどうするんだ？」

「僕は、僕はどうしたらいいんだろう・・・」

アルとの事が頭から離れない僕はケンちゃんに会いに行くという言葉葉が出てこなかった。

「俺はな、時計だったんだ。いろんな人の手を渡って、何度も修理されて・・・やっと持ち主のもとに着いて、そのときはちよつと故障してて。俺は他のみんなのように、俺のことを修理して大事にまた使ってくれるんだらうって信じて疑わなかった。でも、そいつは俺が故障していたことを知るとそのまま路地裏に投げ捨てたんだ。」

「で、悪魔になったの？」

「本当は妖精になれると思ってたんだけどさ、気がついたらこんな格好をしてたってわけよ。」

「ザッシュ・・・」

「本当に人間は自分勝手だぜ、自分の都合で俺達を作って、いらなくなったら捨てるんだ。次から次へと新しいものが出来てくるから、少しでも壊れてたら捨てるのさ。それが現実さ。修理したり、直したりすればまだまだ使えるのにな。だから、それを少しでも分かってやるために、俺はこの力を使うのさ。」

そういつてザッシュは、僕にいたずらっぽそうに笑って見せた。

「ポツクルー。」

上のほうから声がした。

「マリーだ！」

見上げる僕にザッシュは

「お前さんのお付の妖精が来たようだな。じゃあ俺はここでさよならするぜ。どんな結末が待ってようと、必ず旅を成し遂げるんだ。頑張れよ。」

そういつてパタパタとザッシュはどっかに行ってしまった。

「ポツクル、大丈夫？探したのよ！」

「う、うん」

そう元気なくうなづく僕の顔をマリーは覗き込みながら

「結構疲れているようね、今夜はこくらへんで寝る場所を探しまし

よ
ー

マリーはどこか僕を気遣うかのように一緒に歩きながら、今夜の寝る場所を2人で探すのだった。

『想い』

僕はあれから一言も話すことができなかった。

無言で箱に落ち葉を敷いてるときも。ずっとアルトのこと、そして悪魔のザッシュが言ったことが

頭の中でグルグルと回って、思い出すたびに僕の胸を締め付けた。

横になって、僕はマリーにやっと話しかけることが出来た。

「マリー今日はごめん。」

そういったマリーは僕のほうを向いて

「ううん。ポックルが無事だっただけでそれだけで良かった。わたしがいない間に何があったかは分からないけど、話したくなったらでいいから。」

「ありがとう。」

僕はそんな優しいマリーにただお礼を言うことしかそのときは出来なかった。

次の日、目が覚めるとマリーが剣で方向を確かめながら、驚きの声をあげた。

「ポックル、これってひよっとしたら、ひよっとするかも」

「マリーどうしたの？」

「もしかしたら、もうかなりケンちゃんに近いのかもしれない。」

そういいながら剣を僕に見せてきた。

「こ、これって・・・」

「ええ、点滅してるわ。しかもこんなに早く。」

昨日はいろいろあったせいか、剣の状態を確かめる暇がなかったけれど、確かに剣は点滅していた。

「でも、またそんなに旅してないのに・・・」

マリーは何年も、アルトだって3ヶ月かかったんだ、なのにどうして・・・

僕の考えてることを見透かしたかのようにマリイが言った。

「まあ、確かに少し早いような気がするけれど、これでなんとなく分かった気がする。やっぱりポツクルあなたは捨てたれらわけじゃなさそうね。」

マリイの言葉に僕は思わず聞き返した。

「それってどういうこと？」

「あなたの捨てられ方が普通じゃなかったの。もし本当にあなたが捨てられたとしたならば、その大きさだもの、他の物と一緒にの袋に入って捨てられてたほうが自然だわ。」

「じゃあ」

「そ、おそらくケンちゃんが何かの拍子でポツクルを落としちゃって、そして、あなたを誰かが拾ってあそこに置いたって事。まああくまでもわたしの想像の域を出ないんだけど、その可能性は大きいわ」

ケンちゃんは僕を捨ててなかった・・・僕はそれだけでうれしくなった。

「この様子だと、後一、二日ってところね！」

そういつてマリイは羽をはばたかせて宙に舞い上がった。

「どうしたの？ポツクル。」

「ほんとに僕は捨てたんじゃないかなかったんだよね？」

僕はマリイを見上げながら言った。

「まあ、あくまでも可能性だけど、そうであるのはほぼ間違いないとおもうわ。それを確かめるためにもいきましょ。」

「うん。」

僕は心の中のもやもやを振り払い、マリイの後を歩き出した。

それから僕の剣が青く光ったのは三日後の日が沈んでからだった。

目の前の白い大きな建物を見上げながらマリイが話しかけた。

「ポツクルどうする？このまま会いに行く？」

僕はどうしてもマリイに話しておきたいことがあった。だから

「うん、明日にしようよ。心の準備が欲しいし、疲れちゃった。」

「そっか、わかった。」

そして僕たちは花壇の横の脇に積み重ねられたブロックの穴の一つで寝ることにした。

いつものように落ち葉をしいて剣を明かり代わりに立てかけた。奥に座ったマリイが、ぼうつと青い光に照らし出される。

「今夜で旅もおしまいだね。」

マリイがどことなく寂しそうに言う。

「うん。でも僕は本当はケンちゃんに会うのが怖いんだ。」

「どうして？」

僕の言葉が意外だったのか、マリイが聞き返してきた。

「僕はあの日・・・」

僕はアルトとザッシュに会ったこと、そしてアルトの身に起こったこと全てをマリイに話した。

「そう、そんなことがあったのね・・・。」

「ごめん。今の今まで話せなくて。」

うなだれる僕にマリイは

「仕方ないわ。確かにその悪魔のザッシュが言ったことは間違っていないわ。そう、再会の全てがハッピーエンドで終わるわけじゃないわ。」

そう静かにマリイは言った。

僕はそんなマリイに

「ねえ、マリイ、マリイはもしもだよ、もしも、マリイがあの時、持ち主に再会したときに自分を必要としてなかったり、すぐに捨てたりされてたら、マリイは悪魔になってた？」

突然の僕の質問にマリイはそして少しだけ考えて、こう言った。

「わたし達『物』はこの世に存在する限り、いつまでも物であり続けることは出来ないと思うの。使い込まれれば、磨り減るし、壊れるし、そして捨てられる。でもそれって箱に入っただけじゃ、店に

並んだままじゃ何にも起きない。何の運命か、私たちを選んでそして使ってくれたから起こる事なの。そして『想い』が宿るほど大事にしてくれたから、旅をすることが出来る。わたしの場合、長い旅だったからかもしれないけど、わたしは決めてたの、たとえどんな結末が待っていても、会うことが出来たら、『私を選んでくれてありがとう』って、その『想い』を伝えることが出来たらそれでいいって。」

「ありがとう、か。僕は、悪魔になっちゃいそうで怖いよ。悪魔になつてケンちゃんを不幸になんかしたくないのに。もうこのままいつそのこと、ケンちゃんに会いに行くのをやめたほうがいいのかもしれない……。」

マリーは僕の震える手をやさしく握り締めながら

「そんなことはないわ。あなたにはものすごく、あたたかい『想い』が宿っているの。わたしは、あなたに込めたケンちゃんの『想い』を信じるわ。それに、ポツクルだってケンちゃんに伝えたい『想い』あるでしょ？」

「僕の伝えたい『想い』？」

「ずっといつてたじゃない、僕はずっとずっとケンちゃんと一緒にいたいんだって。その『想い』を伝えるためにも、明日ケンちゃんに会いに行くの。もし、再会したときに必要としてなかったら、それはそれでいいじゃない。妖精になってわたしと一緒にいきましょ！」

そういつてマリーは僕に笑い開けてくれた。

ただケンちゃんに会いたくて始まったこの旅。そうだ、僕はずっとケンちゃんと一緒にいたかったから、だからケンちゃんに会いにここまで来たんだ。会ってからのことはそのとき考えればいい。もしも一緒にいられないのなら、妖精になつてマリーと一緒に行くのもいいかもしれない。そうすればケンちゃんを不幸にしなくて済む。

「そうだね。ありがとう。僕は最後までこの旅をやり遂げるよ。」

僕はマリーの手を握り返しながら、僕の迷いはもう消えていた。

旅の終わり

「う、うーん」

ちゅんちゅんと雀の鳴き声が聞こえてきて、僕は目をこすりながら目を覚ました。

背伸びをしながら横を見ると、マリーの姿がなかった。きっとまわりの様子でも見に行ってるのだろう。

ブロックの穴から出ると、暖かな光が僕を包み込んだ。

「いよいよか。」

僕はこれからケンちゃんに会うのだと思うと、はやる気持ちが半分、こわい気持ちが半分。僕はぶるぶると体が震えた。

「ポツクルおはよう！」

空からマリーの声が降ってきた。

「マリーお早う。どこに行ってきたの？」

マリーは降り立つとストーンと近くの石の上に座った。

「あー疲れた。広いわねここは。そうそう、ここがどこだか調べてきたわ。ここは病院よ。」

「ビョウイン？」

「そう。怪我をしたり体の具合を悪くした人が来るの。まだ剣が青く光ってることは、ここに泊まっているって事ね。」

「え、ケンちゃん、大変なことになってるの？」

僕はケンちゃんのことを心配でたまらなかった。

「うーん、病院に泊まったことは、何かしら、怪我なり病気になるしたんだと思うけど、殿程度かまではわからないわ。」

「そっか・・・」

「でも、まあそのほうが探す側としては好都合なんだけどね。」

そういつてマリーは立ち上がると、近くの葉に溜まっていた朝露を両手ですくって飲んだ。

「うーん、やっぱ運動の後の一番しずくはうまいわあ、じゃあ早速、

ケンちゃん探しと行きますかぁ！」

支度を終わると、僕達は建物のなかにいくために入り口のほうへ向かった。病院に来ている人たちの中に

子供の声が聞こえると、思わずそっちに目が行ってしまふ。

「そっちみたってケンちゃんはいないよ」

とマリーは言うけれど、僕は振り返らずにはいられず、何回も振り返ってしまった。

中に入ると

「待ってて」

といってマリーが飛んでいってしまった。

僕はマリーを待っている間、見渡すと、すごい人でひしめき合っていた。

「こ、この中からケンちゃんを探せるのかな？」

途方に暮れているとマリーが戻ってきた。

「子供が入院しているのは3階だから、そこに行くわよ。こっちにきて！」

マリーについていくと、そこには上に向かって動く階段があった。

ケンちゃんと一緒にいた頃、乗ったことがあった。

「これ知ってる？これに乗って3階まで行くわよ。」

僕は階段と階段の隙間に挟まれないようにタイミングを見て飛び乗る。

「わぁ」

すごい速さで僕を乗せた階段はどんどん上に上がっていった。

「そろそろ降りるよ」

マリーの合図で今度も挟まれずにジャンプして床に下りる。

そんなことを3回繰り返して、ようやく僕達は目的の階に着いた。

僕は子供がいる階と聞いていただけに、たくさんの子供がいるとおもっていたけれど、子供は一人もいなかった。

「ケンちゃんはどこにいるの？」

「きつとお部屋の中よ」

そういつて脇にずらつと並んだドアを指差しながら言った。

「一部屋一部屋見ていくしかないわね。」

手前の部屋から見ていくことにした。

「うゝん、ここにもいないわね・・・」

全ての部屋を見て回ったけれど、結局ケンちゃんはいなかった。

「帰っちゃったのかな？」

そういう僕に

「剣はどうなってるの？」

僕は剣を引き抜いてみるとまだ青いままだった。

「おかしいわね・・・」

マリーが首をかしげていると、カラカラカラ、廊下の向こうから二台がやってきた。そして僕達の目の前の部屋の中に入ってしまった。

「まさか！」

僕とマリーは扉が閉まる前に何とか部屋に滑り込んだ。

入ると、ベッドの上には子供だ寝ていて、体中から透明な管が出ていた。

「こつからじゃあ顔が見えないね。」

マリーは僕の腕を掴んでベッドとベッドの間にある台の上まで飛んで行ってくれた。

「ケンちゃん！」

そこにはまぎれもなくケンちゃんが横たわっていた。

頭には白い布が巻かれていて、口元に透明なものがかぶさっていたけれど、どうやら眠っている様だった。そしてその頭を優しくなでる手があった。

「ケンちゃんのパパだ。」

見覚えのある顔を見て僕は本当にケンちゃんの元に帰ってきたことを実感した。

コンコンと音がしたかとおもうと白い服を来た人がやってきた。
「ちよつとよろしいでしょうか」

そう言われて、ケンちゃんのパパもその人について出て行った。

「私もちよつと行つてくる！ポツクルはここにいて！」

マリーは羽をパタパタさせて、ケンちゃんのママ達のあとを追った。
「ケンちゃん、僕は君に合うために戻ってきたよ……」

しずかに僕はケンちゃんに語りかけた。

これで僕はまたケンちゃんと一緒に居られる。

最後まで頑張つてここまで来てよかった。これも、マリーのおかげだよな。

でも、マリーには悪いけど、僕は妖精にはならない。だって、ケンちゃんはきつと僕をまた必要としてくれる。早く目を覚まして僕と一緒に遊んでくれないかな。僕はまたケンちゃんと一緒に遊んでいるところを想像してわくわくしながら、ケンちゃんの顔を見ていた。しばらくするとマリーが戻ってきた。

「わかったわ、すべてが。」

「え？」

驚く僕の横に座つて、マリーは説明しだした。

「ケンちゃんは1週間前に道で遊んでいたところを車にはねられて事故にあつてしまつたんだって。きつとそのときあなたはケンちゃんと離れ離れになつたのね。で、この病院に担ぎ込まれたときは重症で大変だつたらしいけど、なんとか命を取り留めて、夕べ意識が回復したんだって。そして、それまでいた部屋からここに移つてきたらしいわ。タイミングが良かったのね、わたし達。」

「それって、ケンちゃんは……」

不安そうに聞く僕に

「ええ、このまま安静にしていれば、元気になるそうよ。よかったね、ポツクル。」

元気になるって聞いて僕はホッとした。

「で、どうする？やっぱりこのままケンちゃんのそばにいる？」

「うん。起きるまでまつて、また一緒に遊ぶんだ。僕はそうしたいんだけど、いいかな？」

そつという僕を見てマリーは頭をかきながら

「まあ、仕方ないわね。本当はあなたには妖精になってほしかったけれど、でもそれはあなた自身が決めることだし、いいわ。」

「妖精になれなくてごめんね、マリィ。そして、ありがとう。」

そういつて僕はマリィの手を両手で握った。

「じゃあ、これにて、魔法の国の戦士ポツクルの旅はおしまい。わたし行くわ。」

「え、もう行っちゃうの？」

ぼんぼんお尻をたたきながら立ち上がるマリィを僕は見上げた。

「この世にはまだまだポツクルのように持ち主に会いたくても会えていない『想い』はたくさんあるからね。それを導いてあげないと、それがわたし達妖精の使命だからね。」

僕も立ち上がってまっすぐマリィを見る。

「わかった。じゃあ、マリィ、さよなら。本当にありがとう。」

「わたしこそ、守ってくれたり色々してもらったわ。ありがとう、元気でね。」

そうしてマリィが飛び立とうとしたときだった。

「う、うう」

ケンちゃんのうめき声と共にビービーと音がけたたましくなった。

「どうしたんだ？」

僕とマリィが急の出来事でオロオロしていると、白い服を来た人が部屋に飛び込んできた。

「大変、先生、至急307号室に来てください。」

次から次へと入ってくる人の中にケンちゃんのパパの姿もあった。

「先生！こっちです」

先生と呼ばれた人が、ケンちゃんの体を触って

「これは大変だ、君は・・・を、こっちの君は・・・を大至急持ってきてくれ。まさかこんなことになるなんて・・・」

ケンちゃんは苦しそうにハアハアとあえいでいる。

「ケンちゃん、しっかりして！」

ケンちゃんのパパがケンちゃんのパパのケンちゃんの手を握って必死に呼

びかける。

「マ、マリー、これって・・・」

「どうやら急変したみたいね。ただでさえ重症だったんだもの、おかしくはないわ。」

マリーの顔を見て僕はケンちゃんがただならない状態であることを悟った。

「先生、健一は、健一はどうしたんですか？良くなってるんじゃないかったんですか？」

ケンちゃんママが先生の服を掴んでいる

「どうやら、手術した部分から出血をしたようで、今日の朝の診察ではなんともなかったんですが・・・

よもや、手の施しようがありません。」

「そ、そんな・・・健一、死なないで・・・」

ケンちゃんママが鳴きながら必死にケンちゃんの名前を呼ぶ。

「そんな、せっかく会えたのに・・・死んじゃうって・・・そんな」
呆然とする僕の横で、マリーは顔をそらして涙をこらえている。

なんとか、出来ないのか、僕に何か出来ないのか・・・

そのときどうしてか僕はアルトとザッシュのことを思い出した。確かザッシュはアルトの『想い』で

アルトのご主人様に不幸を呼んだ。そうだ、じゃあ、

「マリー、君にお願いがあるんだ。最後のお願いだ、」

僕のほうを振り向いたマリーをじっと見つめて僕は言った。

「僕の『想い』を使ってケンちゃんを助けてあげて！」

するとマリーは静かに首を振りながら、

「確かにわたしは想いを使って人を幸せにすることが出来るわ。でも、限度があるの。確かにあなたの

『想い』は特別だからどうなるかは分からないけど、でも、そしたらあなたは『想い』と共に消えてただの物になるわ。」

「そうだよ、でもそれでケンちゃんが助かるならそれでいい。僕はケンちゃんがいたから、ケンちゃんが僕を選んでくれたから、今

こうしてここにいられるんだ。今度は僕がケンちゃんに恩返しをするんだ！だから、マリーお願いだ。」

僕は必死になってマリーにお願いした。

「……わかったわ。」

マリーは静かに言った。

僕は覚悟を決めて目を瞑った。これからマリーに食べられるんだ。

「ポックル、何してるの？」

「え、だって、僕はマリーに食べられるんじゃないあ……」

「もう、ポックルたら……」

「え？」

目を開けると、おかしそうに笑っているマリーの顔があった。

「わたし達妖精は『想い』は食べないわ。歌に想いをのせるの」

そしてマリーの頬に涙が流れた。

「本当に、最後までポックルたら……でもわたしは、そんなあなたが好きよ。妖精になってずっと一緒にいてもらいたかった。本当は、あなたがケンちゃんに必要とされなくなる日まで待つつもりだったの。なのに、なのに……」

僕は泣きじゃくるマリーの体を抱き寄せた。

「ありがとう。僕も、マリーが好きだよ。でもケンちゃんをこのままにはしておけない。だから、最後のお願い。」

そういつて僕は体を離れた。

「僕はどうしたらいい？」

「出来るだけ、ケンちゃんのちかくに行くだけ。後は任せて。」

「うん。わかった」

僕は背中の中の盾と剣をマリーに渡した。

「これ、マリーにあげるよ。じゃあ、マリー、行ってきます。さようなら」

僕は後ろに出来るだけ下がり、助走をつけてポーンとジャンプした。クルクルクル、ストーン。僕はケンちゃんの手の中に収まった。そして、指と指の間から僕はコクンと一つマリーにうなずいた。

そしてマリーは静かに歌いだした。

「……………これは、ちっぽけな戦士の

ちっちゃんな冒険

ただ会いたい それだけで

ひたすら突き進んだ

いつ終わるとも知れない

その旅路の果てで願ったのは

その身を希望の剣に代えて

いとしき人の幸せを

この『想い』があの人に伝わることはないけ

れど

どうかこの願が叶いますように

どうかこの願が叶いますように

どうかこの願、叶いますように……………

「

だんだん僕は意識が遠くなってくるのを感じた。じんわりと僕がほ
どけていく。

でも不思議とこわくはなかった。だって僕は今ケンちゃんの手の中
にいるんだもの。

ケンちゃんは僕でまた遊んでくれるかな。元気に遊んで欲しいな。

・
・
・
・
・

それが僕の本当の願い。

．．．．．そして僕は、消えていった。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

あれからどれくらい経ったんだろう．．．
僕はゆつくりと目を開けた。ここはどこだ？

立ち上がると、目の前に半分溶けかけたゴム人形があった。

しかしそれはごみではなく、丁寧に小さな箱の中に保管されていた。
そうだ、これは僕だ。どうして僕は僕を見ることが出来るんだろう。
ふと横を見るとガラス窓に写った自分の姿に驚いた。

「目覚めたのね」

振り返るとマリーがいた。

「マリー？」

「あれから20年。もうケンちゃんは大人になったわ。」

僕はそれを聞いただけでうれしかった。

「はい、これ」

そういつてマリーは僕の剣と盾を渡してくれた。

「これは、僕の剣と盾だ。ずっと持っていてくれたんだね。」

僕は剣を盾に納めると背中に背負った。

「マリー待たせたね。行こうか」

そして僕はマリーの手を取って

そして空にむかって力いっぱい羽ばたいた。

旅の終わり（後書き）

最後まで読んで下さって、ありがとうございました。

これで「消しゴム戦士の冒険」は終わります。

どんな小さなことでもいいので、ご指摘、アドヴァイス、評価をいただけたら

次の作品にも生かしますので、どうか宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5669q/>

消しゴム戦士の冒険

2011年2月20日08時16分発行